

## ミミエボシは夏に増えるのか？ Part 2 ～付着度と水温の関係性～

イルカ通信No.87で取り上げた「ミミエボシは夏に増えるのか？」に関するお話の第2弾になります。前回のお話では、ミナミハンドウイルカ（個体識別番号：#27、愛称：モグオ）へのミミエボシ（フジツボの仲間）の付着度には季節的な変動が見られ、5～10月ごろに付着度が高くなる傾向にありそうだ、ということをお伝えしました。夏に多く、冬に少なくなるということは、何か海洋環境が関係しているのでしょうか。

一般的に、フジツボの仲間の寿命は種によってさまざまであり、1～2年のものもあれば、10年以上のものもいるのですが、水温や塩分、乾燥などへの耐性が生存に関わってくるようです。また、成長の速さも環境に左右され、同じ科にあたるエボシガイ (*Lepas anatifera*) は、水温が低いほど成長が遅いようです。そこで今回は、ミミエボシの付着に関する傾向をもう少し詳細に明らかにするために、水温との関係を調べてみることにしました。

結論はといいますと、イルカへのミミエボシの付着度と水温との間には、統計的に強い結びつきは確認できませんでした（図1）。グラフを見ると、水温が高いときほど付

着度も高くなる傾向にあります。しかし、その傾向は弱く、両者の関係にばらつきがあるのがわかります。水温が高いからミミエボシが増えた、水温が下がったからミミエボシが減った、と断言するには弱い結果となりました。

ところで、小笠原の海でミミエボシが付着している生物といえば、冬に北の海からやってくるザトウクジラが代表的です。さらに細かく言うと、ザトウクジラの体の表面に付着しているオニフジツボという4～5cmほどのフジツボによく付着しています（図2）。もし、ザトウクジラの来遊によって小笠原の海にミミエボシがやってきている、なんてことがあれば面白いですね。



図2. オニフジツボとミミエボシ（図内下）

ミミエボシは、ザトウクジラに付着するオニフジツボによく付着している。

大槻清準『鯨史稿』第6巻（1808）より。

【参考】[1]平野禮次郎・山口寿之監修 日本付着生物学会編. 2006. フジツボ類の最新学. 恒星社厚生閣 [2]MacIntyre, R. J. 1966. Rapid growth in stalked barnacles. *Nature* 212: 637-638. [3] 大槻清準. 1808. 鯨史稿. 第6巻

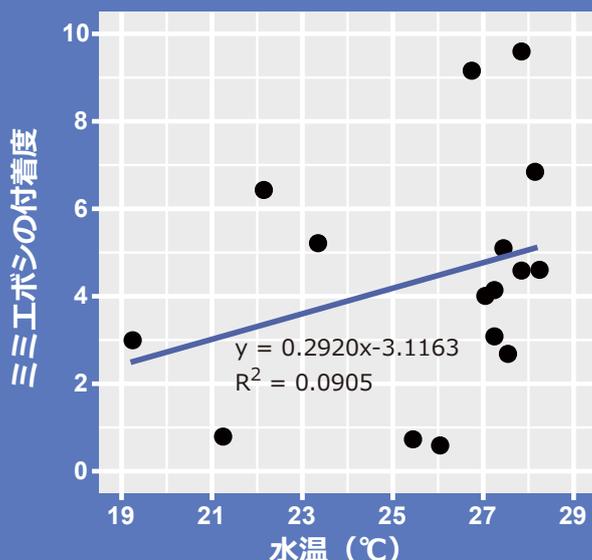


図1. ミミエボシの付着度と水温の関係

水温が高くなると付着度が高くなる傾向にはあるが、その傾向は弱いものであった。

※水温は、東京都小笠原水産センター発行「おがさわら海の情報」に掲載されている二見湾定地水温観測結果から読み取った値を使用した。

### クジラの陸上観察会のお知らせ

2019年2月9日より、おがさわら丸入港日の夕方、父島ウェザーステーション展望台にて「クジラの陸上観察会」を実施いたします。4月22日の入港日まで行いますので、ご興味のある方、ご参加お待ちしております。

一緒に展望台からザトウクジラを探しましょう！！

場 所：ウェザーステーション展望台  
(Bしっぷから徒歩約30分)

時 間：おがさわら丸入港日の16時～17時

参加費：無料

※天候・海況不良の場合は中止

